

佳作

0.2 秒を超える

宮城県仙台市立台原中学校

3年 高橋 洋翔

「0.2 秒」これは、去年の中総体で超えることができなかった数字である。悔しかった。悔しいとしか言えなかった。あれから1年。

私は、陸上競技部で1500メートルの競技に取り組んでいる。市中総体では、予選で各組の上位3人、または全体で記録上位8人が決勝へと駒を進めることができる。そこで入賞できると、県大会に出場できるのだ。私は「県大会出場」を目標に、練習を重ねた。でも、本番でその努力は報われなかった。0.2秒記録が足りず、予選で敗退した。

先輩たちが部活動を引退し、自分たちが部活動を引っ張っていく番になった。これから頑張っていかなければいけない、それは頭ではわかっていた。でも、私はずるずると「0.2秒」の悔しさを引きずっていた。後輩が自分の言うことを聞いてくれなかったり、指示通りに行動してくれなかったりすると、すぐにいらついで、部活動をさぼってしまうこともあった。こんな状態がしばらく続いた。

「夏休みに駅伝練習に参加しないか。」

友人が僕を誘ってきた。私は「0.2秒」の呪縛にとらわれ、内心陸上が嫌いになりかけていた。しかも、練習がづらいことはわかっていた。普段の練習とは比べものにならないほど、走る量が多い。その上、夏の暑さは尋常ではない。さらに、私は早起きが苦手である。悪条件が重なる駅伝練習に、前向きに取り組めるはずがない。そう思った。

「洋翔、駅伝練習、参加しなさいよ。」

母が私の気持ちを知ってか知らずか、言ってきた。私はびくっとした。そんな私の様子を見て、おそらく母は悟ったのだろう。

「洋翔、中総体、悔しかったって言ったよね。駅伝の練習は、絶対力になるから。」

駅伝経験者の母の言葉には、とても説得力があった。電流が走った。はっきり

「逃げに入っている自分」を感じた。やらなければ、「0.2秒」の悔しさは、いつまでたってもなくなならない。私は、駅伝練習をすることに決めた。

練習が始まると、思ったとおりに練習だった。そんな時はいつも「0.2秒」を自分に言い聞かせて頑張った。

そのあとに行われた新人大会で、驚くことにこの駅伝練習の成果が表れた。

記録が伸び、8位に入賞したのだ。自分でも気づかないうちに、走力がついていたのだ。このまま頑張れば、「0.2秒」の壁を越えられるかもしれない。今までの自分が変わる出来事だった。毎日本気で練習した。

6月、最後の中総体。1年前のリベンジがやってきた。不安などなかった。自信しかなかった。前哨戦となる大会でも自己ベストを更新していた。「陸上って楽しい」と思えた。スタートリストを見て、これならいけると手ごたえを感じた。予選を2位で通過し、決勝に進出。一つ目のハードルを超えた。いよいよ決勝だ。去年、見られなかった景色に私は緊張していた。でも、このレースで中学校の部活動を終わらせたくない。チームメートのみんなも応援してくれている。今までの練習の日々が一挙に蘇ってきた。やるしかない。あの「0.2秒」を超えるために、無心で走った。ゴールして、タイムを見た。4分25秒。あの「0.2秒」を、あの「0.2秒」を超えたのだ。その上、順位は4位。県大会出場だ。とてもうれしかった。私は誇らしい気持ちで、表彰台に上がった。

その後、「県大会でも入賞」を目標に、私はひたすら練習に励んだ。部活動ができる喜びと自分に勝てた自信を感じていた。

初めての県大会。今までで一番緊張した。同じ中学校で県大会に出場する生徒が少なただけに、みんなの応援がひしひしと伝わって、僕にプレッシャーとなつてのしかかった。スタートラインに立ち、号砲とともに走った。決勝に行きたい、そう思いながら全力で走った。最後の200メートルでスパートをかけ、4位まで上がり、さらに加速して、2位でゴールした。次は決勝だ。宮城県でわずか12人の選ばれた強者ぞろいである。周りはみんな速そうにしか見えなかった。レースはいつもより速いペースで進んだ。このペースについていくしかないと思い、無理にでも頑張った。しかし、やはり無理がたたって、10位でゴール。もう少しできたかもと後悔も残った。

あの「0.2秒」のお陰で、私は成長できたと思っている。そして、この経験を次につなげたいと思っている。高校でも陸上を続け次の「0.2秒」を乗り越え、また表彰台からの景色を見たい。